



さらにこの日は、名札拒否を共に闘う国労千葉青年部を代表して渡辺副青年部長が登壇し、(彼は名札拒否の駅助勤者オルグを真の理由に、まったく不当なデッチあげによって六月六日以降無期限乗務停止攻撃をうけ、これと闘っている)「名札の問題は、なんでも当局の言うことに従えという攻撃であり、当局に屈服する青年部にしようというものです。さらに、七月本答申は三人に一人の首切りを提案しようとしています。これらの攻撃は、労働者自らが率先してやめろ、一切闘わせ

「名札拒否」闘争勝利の地平を更におしあげ 本答申粉碎・中曽根打倒の総決起

7~8月

日刊 労働千葉

85. 7. 10
No. 1985

7/8 青年部120名で局前総決起集会

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八(動力車会館)
(鉄電)二九三五(六)・(公衆)〇四七二(22)七二〇七

七月八日、十八時より千鉄局前において「過員」名札攻撃粉碎、七月本答申粉碎、7・8 抗議集会を一二〇名の結集をもって青年部は実現した。この集会において青年部を先頭に十万人首切り阻止、「分割・民営化」粉碎、中曽根打倒の一大闘争を切り拓く決意を全体でうち固めた。集会は、名札拒否、ワッペン闘争貫徹から始まる今夏実力闘争突入宣言の場となった。

【青年部通信員・発】

「労働者の魂かけた闘いだ。断じて屈しない！」

集会は内田常任の司会のもと、怒りのシュプレヒコールで始まった。開会のあいさつの後、田中青年部長は「当局は『過員』活用よりも名札着用を優先させた。これに対し労働千葉・国労の83名の仲間全員名札拒否を貫いている。これは重大な闘いである。労働者の闘う魂を奪われるのかどうかを賭けた闘いだからだ。我々は名札拒否闘争が首切り反対闘争であることを見据え闘う。絶対に屈しない。また、今闘えなくて87年『分割・民営化』の時に闘えるわけがない。七月本答申粉碎、労働革マル一掃にむけ総決起しよう」と訴えた。次に来賓として、本部より布施書記長が来られ「労働者は団結することによって生活と権利を獲得してきている。しかも、その過程は、一人ひとりの激しい闘いの積みあげによって築いてきたものだ。今回の名札拒否を貫く青年部の闘いは本物だ。この闘いを労働千葉全体のものへと発展させ十万人首切り攻撃と対決していこう」とあいさつされた。

83名の決起勝利を突破口に、全員が腹をくくって闘おう！

名札拒否の闘いを全参加者のものへと深めていくなかで、集会の基調提起を行った新藤副青年部長は、

①当局の名札強要攻撃に対して83名の闘いを先頭に勝利していることをはつきりさせよう。当局は「過員」扱いのおどしに屈しなかった83名の闘いに完全に動転している。名札拒否をとおして我々は、職場支配権を圧倒的に優位にした。さらに名札拒否、ワッペン闘争貫徹で闘おう。②七月本答申を前に日帝・中曽根は「分割・民営化」一十万人首切りの先兵として送りこんだ仁杉を自ら更迭し、杉浦へと総裁の首をすげかえた。「分割・民営化」の狙いは、膨大な権利をめぐるぶんどりでありと国鉄労働運動解体であることを再度鮮明にさせ、今夏全国の先頭で闘おう。③戦争国家づくりのための国鉄労働運動解体攻撃に対し、中曽根打倒を真正面から掲げ、三里塚―国鉄決戦勝利の実力闘争に決起しよう、と訴えた。

この基調提起をうけて各支部青年部代表が一人ひとり決意表明した。青年部の決意は、一言でいって成田支部大野青年部長が言った「労働千葉は腹をくくって闘おう。中曽根と対決し、ひとあばれしよう」という心意気だ。

最後に繁沢書記長より今後のワッペン闘争以降の方針提起をうけ、千鉄局玄関前で力強いシュプレヒコールをひびかせ集会を終了した。